中論疏記引用の中論注釈書

平　井　俊　榮

はしがき

「中（観）論疏記」（八巻或いは十巻本末）[1]は、羅什訳「中論」四巻の現存唯一の注釈書である「中観論疏」（吉蔵撰十巻本末）をさらに注解した書である。著者の安澄（七六三―八一四）は善議（七二九―八一二）に三論を学び、日本三論宗入唐第三伝の道慈（―七四四）の法孫にあたる。[2]伝によればその学は密教を兼ねて議論絶倫といわれ、当時西大寺にあつて「天下の義学敢えて之に敵するなし」と称せられた唯識法相の大家泰演律師としばしば論争し、これを破したと伝えられる。安澄の時代は三論の宗風がようやく衰えてきた頃であるが、その主著である「中論疏記」（八〇六年成立）は、わが国南都三論宗の精華とも称すべきもので現存する日本三論学者の著述の中では最も古いものである。その内容を見るに、吉蔵疏の注解という制約もあつてか、思想体系的な論書というよりはむしろ吉蔵の疏をめぐる考証の博識精緻なことにより多くその特色を発揮したもので、南都における三論研究の百科全書的な集大成である。したがつて、本書の中には今日散逸して見ることのできない各種文献や諸学説の引用も数多く見られ、中国日本の三論研究にとつて貴重な資料を呈するものである。[3]とくに中国日本を通じて古来漢訳「中論」を注釈したと伝えられる人は非常に多いが、現存する中論注釈書というのはわずかに三つで、吉蔵の疏と安澄の疏記のほかに快憲の「中観論品釈」一巻の小論が存するに過ぎない。[4]しかし、安澄の時代には少くとも次の十種の注釈書が存在していたことが疏記の引用からうかがわれる。すなわち、

中論疏	二巻	曇影	中論疏	五巻	智琳
〃	〃	十巻	吉蔵	〃	〃 十二巻	碩
〃	〃	五巻	元康	〃	〃 （不明）	琛法師
〃	文句	二巻	僧荘	〃	玄義 五巻	法朗
〃	玄義	一巻	吉蔵	〃	疏 四巻	浄秀

そこで本稿では、この安澄疏記の中に紹介せられている各種

文献の中、中国の三論学者によつて書かれた漢訳中論の諸注釈書について、その特色や吉蔵疏との関連等について若干の考察を試みたいと思う。ただし、智琳の「中論疏」についてはすでに同様の視点からかつてこれを詳細に論じたことがあり、[5] また、元康師の「中論疏」碩法師の「中論疏」についても、これらが安澄の疏記製作の根幹をなし、吉蔵疏に対していかなる位置を占めるかについて同時に略説しておいたので、ここではとくに旧稿の補遺として、前記以外の中論注についてその問題点や疑点を指摘するにとどめる。

(一) 曇影疏　二巻　これは漢訳中論の注釈としては最も古いものと考えられる。曇影は、羅什による中論の翻訳に際して僧叡とともにその序文をも製し現存している。[6] しかし僧叡は、羅什教団の最長老としてその他の羅什の翻訳書の多くに序文を書いた人で、おそらく中論についても序文のみを製し注疏はなかつたものと思われる。したがつて、曇影は羅什門下で最初に中論を注釈した人とみなされ、伝記および経録にもその旨明記されている。吉蔵がこの曇影疏を長安羅什教団の中論研究を代表するものとして珍重したことは疑いなく、自疏の中に「曇影の制する疏に明かすが如し」(T・四二・七c) とか、「関内の曇影法師の中論序に云く」(T・四二・二〇b) 或いは「影公云く」(T・四二・一三二c) といつてこれを引用している。しかし、全く断りのないものでも明らかに曇影疏を依用していると思われるものもある。たとえば、

貪欲有二種種名一。初名レ愛。次名レ着。次名レ染。次名二婬欲一。次名二貪欲一。(中論染染者品第六)

を両者は次のように注釈している。

曇影疏

三毒是万有之本。而貪在二其首一。若破二貪本一則滞レ有自喪。初名レ愛。如下見二一色一念想始生上曰レ愛。心遂連嘱曰レ着。纏綿深固曰レ染。狂心発動曰レ婬。方便欲二以為二己物一是名曰レ貪。前三尚軽故無レ不レ在。後二遂重故唯欲界。(日本大蔵経三論章疏、以下Nと略記、五七六下)

吉蔵疏

貪欲有種種名下第二解釈。初名レ愛者。如下見二一色一初起中想念上名レ之為レ愛。心遂連嘱為レ着。纏綿深固名レ染。狂心発動名為二婬欲一。方便引取欲レ為二己物一名為二貪欲一。前三尚軽即通二於三有一。後二遂重但居二欲界一。

両者は内容的に一致しているのみならず、字句もほとんど同じである。このような例はほかに二十数例指摘することができる。[8] しかし、曇影疏はわずか二巻であり、その数も自ら限られ、吉蔵疏に対する影響度からいえば智琳の「中論疏」五巻に遠く及ばないが、曇影(一四一八)智琳(四〇九—四八七)吉蔵(五四九—六二三)という三人の注釈家による中論注の間には年代的にも発達的な縦の関係を予想せしめるものがある。たとえば「観因縁品」の「従レ変生」という一句の解釈である。まず智琳疏と吉蔵疏を比較してみると、

智琳疏	吉蔵疏
一神通変。能以二大海一為二蘇落一。大地成二金珍一。穢土為二浄土一。浄土為二穢土一。此皆聖人神通力不思議変。二者物自性変。明二有為之法其性無レ常念念変異理無二住時一。如二初生嬰児俄爾老邁一。有為法爾非二人作一也。三者遇縁変。如二永性雖レ冷得レ火成レ湯。寒因縁即復為レ氷。如是等類皆為二外縁変一。四者外道不達。謂別有二変法一能変二万物一。人天六道莫レ不レ由レ之。故云二従変生一也。	従変生者。変生者変有二四種一。一神通変。如二変レ石為レ玉一。二性自変。如二少変為レ老一。三遇縁変。如二氷遇レ寒則変為レ氷一。四者外道。謂別有二変法一能変生二万法一。

（N・一二〇下―一二一上）

すなわち、吉蔵疏のいう四種の〈変〉は智琳疏が典拠であることが知られ、それぞれの説明も智琳疏を要約したものである。さらにこの智琳疏の解釈は曇影疏に基づいていることは、最初の〈神通変〉について曇影が、「或神通変。如二変レ水為レ蘇。変レ石成レ金」と注したと安澄が付記していることからも明らかである。これを智琳は「一神通変。能以二大海一為二蘇落一。大地成二金珍一。穢土為二浄土一。浄土為二穢土一。此皆聖人神通力不思議変」のように敷衍し、吉蔵において再び「一神通変。如二変レ石為レ玉」のように要略されたことが分る。疏記には曇影疏についてはこの〈神通変〉の一句しか引いていないので必ずしも断定できないが、この三疏の間には密接な繋がりがあつたとみてよい。少くとも吉蔵疏の成立にこの二者は与つて力があつたことは確かである。

（二）琛法師疏（巻数不明）

吉蔵疏巻一本に中論の科文に関して、

二者北土三論師明。此論文有二四巻一大明二三章一。初有二四偈一標二論大宗一。第二従レ破二四縁一以下竟二邪見品一破レ執顕レ宗。第三最後一偈推レ功帰レ仏。以レ初摂レ初。故四偈標レ宗在二於初品一。以レ後摂レ後。故最後一偈推レ功帰レ仏在二後品一也。　（T・四二・七c）

と北土の三論師の説を紹介している。この段に注記した安澄は、

今検二琛法師疏第一巻一云。然此論大判レ文別有レ三。初有二四偈一標二論大宗一。四縁以下正明二立品解釈一。末後一偈明二帰功稽首所以一。（後略）　（N・六七下）

といつて琛法師の「中論疏」第一巻を引用して吉蔵疏がこれに拠つたことを明記し、「今北土の三論師と云うは琛法師なり」（N・六八上）と証言している。吉蔵疏巻二末にある北土三論師の八不釈の紹介に際しても同様に琛法師疏を引いてこれを注記している。(9)

そこで、かかる中論疏を著わした琛法師とは具体的に誰かというと、安澄は自ら「琛法師とは晉剡東仰山の竺潛。字は法琛。姓は王。瑯琊の人なり。（中略）晉寧康二年山館に卒

す。春秋八十有九なり」（N・二九三上―下）と「高僧伝」を引いてこれを明かし、「琛法師は是れ中論・百論の疏を作れる師なり。所謂北土の三論師とは是なり」（N・二九三下）と記している。つまり、吉蔵のいう北土の三論師とは「高僧伝」巻第四（T・五〇・三四七c）に記載される法琛で、彼の中論疏を吉蔵が引いたというのである。[10] ところが、安澄もいうように法琛は晉の寧康二年（三七四）に八十九歳で没している。羅什が中論を翻訳したのは弘始十一年（四〇九）であるからこの法琛に中論疏の存在するはずはない。これは明らかに安澄の重大なる過誤である。吉蔵疏には別に羅什以前のいわゆる六家七宗の一人として法琛をあげ、その〈本無義説〉を紹介している所がある。[11] 或いはそのために不用意にこれを同一視したとも考えられる。しかし、本無家の東晉の竺法琛と吉蔵のいう中論疏の著者である北土の三論師とは、吉蔵自身の心証においても全く別人であつた。なぜ安澄はこのような初歩的な誤りを犯したのか、また北土三論師説として吉蔵が実際に引用した中論疏の著者は誰なのか。この点を次に考えてみたい。

この問題の解決を示唆する一文が吉蔵の中論疏自体の中に見出される。すなわち、「観法品」第十七の「云何知二諸法無我一」（T・三〇・二三c）という問に対する答の偈文十二偈の科段に関する見解がそれである。吉蔵疏巻八末に、

次問答如レ文。偈本関内旧分レ之為レ三。初五偈明二声聞禀教得益一。次六偈明二菩薩禀教得益一。後一偈明二縁覚得益一。（中略）近代人云。此是北土瑤師分レ之。蓋不三遠尋二古疏一。故有二此謬一耳。又依二長行末一青目自作二此文一。講者宜レ用也。

（T・四二・一二四c―一二五a）

とある。この「観法品」の十二偈の科段は、中国の中論注釈家の間で諸説の紛叫した所である。吉蔵は前文のように最初の五偈を声聞の得益、次の六偈を菩薩の得益、最後の一偈を縁覚の得益のように三つに分けるのであるが、この三分説は、近代、つまり吉蔵と同時代の人々は北土の瑤師の説であると信じていた。それに対し吉蔵は、すでに関内（長安）の羅什教団においてこの分け方がなされており、さらに青目の長行釈にも明らかであるからこの三分説を用うべきであるというのである。ここで吉蔵が、関内の古疏までもち出して自説の権威づけを行なつたのは、同処に紹介されている法朗（五〇八―五八一）の五分説をも敢えて採用しなかつたなどの理由もあつたからである。しかし、予想されることは、吉蔵が強調するようにたとえそれが吉蔵説の直接の典拠ではなくても、世人のいうように北土の瑤師にもまた中論の注釈があり同じように三分説を採用していたということである。さらに、このことを傍証するものとして安澄は、この段に関して吉蔵以後の三論学者である唐代安国寺元康の「中論疏」を引

用し、対比している。すなわち、

康疏云。此偈文而諸家不レ同。択レ善斯従不レ善斯改。深師最佳。今所二拠用一。然取二其意一不レ取二其言一也。十二偈分為二三章一。初有二五偈一。明二小乗観行一破二小乗所破之法一解二声聞人悟入実相一。次有二六偈一。明二大乗観行一破二大乗所破之法一解二菩薩人悟入実相一。復有二一偈一。明二中乗観行一破二中乗之法一解二縁覚人悟入実相一。准レ之可レ悉。（N・八〇九上―下）

といつている。元康疏が「最も佳し」といつて拠用した深師の説とは、元康は「意を取つて言を取らず」として表現を変えてはいるが、内容的には吉蔵疏において一般に北土の瑤師の説と信ぜられていたものと一致する。つまり吉蔵のいう瑤師と元康のいう深師とは同一人物なのである。そこで、次のような仮説が成り立つ。元康疏の原文がどうであつたか知るべくもないが、安澄の疏記がこれを引用するに際し、本来元康疏にも瑤師とあつたものを深師の如く誤写したのではなかろうか。なぜなら、安澄には北土三論師＝琛師という先入観があつた。あるいは、逆に南都の伝承では瑤師がたまたま深師のように誤写されておつたのではないか。その結果、すでに見たように安澄はこれを東晋の法琛（深）とみなし、前述のような過誤を犯したとも考えられるのである。ちなみに瑤師とは「高僧伝」第七（T・五〇・三七四b―c）に記載する法瑤である。現存蔵経では法珍となつているが、宋・元・明三本ならびに宮内省本とも法瑤である。現蔵経においてさえ、瑤→珍のように誤記されている。瑤→琛（深）という誤写は容易にあり得よう。吉蔵は法瑤については熟知しており、「勝鬘宝窟」や「大乗玄論」「涅槃経遊意」等にその説を引いている。[12]「高僧伝」にも明記されるように「大品般若」の義疏を著わした人である。[13]「中論」に対する注疏がなかつたとは言い切れない。現に吉蔵は、前述のように北土瑤師の中論註の存在を示唆している。したがつて、疏記引用の琛法師の「中論疏」は、法瑤の「中論疏」の如く訂正さるべきである。

（三）僧荘　文句　二巻（或いは三巻）　これは前述の北土三論師の説をめぐつて「述義」[14]の著者が有人説として荘法師の義であるというのを承けて、安澄が「疏記」中にその著書である「中論文句」上巻の一節を引いたものである（N・六七上）。僧荘は「高僧伝」第七の釈僧徹（三八三―四五二）の項にその伝が付記されている（T・五〇・三七〇c）。「述義」によれば羅什門下で成実と三論をよくし、「三論義疏」と「空有二諦論」を著わした僧導の弟子であるという。のちにこの系統は成実の一派をなしたために吉蔵の系統から異端視されたものである。吉蔵のいう北土三論師による中論釈を「述義」は僧荘の「中論文句」であるというのに対し、「疏記」は前述のように法琛の「中論疏」であると反駁している。僧

荘の「中論文句」も経録に記載はなく、「疏記」中にのみその存在が知られ、しかもその引用はこの一箇所だけである。

(四) 法朗　玄義　五巻（或いは一巻）　本書を安澄はつねに「山門玄義」として巻五のみ引用し、[15] しかも歴史的な叙述に限つてのみ依用しているので、はたしてこの書が経録に記載される法朗の「中論玄義」一巻[16]と同一書であるかどうか明らかでない。しかし、この玄義が法朗の著述であることは安澄の次の証言によつても明らかである。すなわち、「玄義」の呼称について安澄は

一山門者。僧證詮師初住二山門一。只後住二山中一。今興皇法朗師以二僧證師上足弟子一故云二山門一。従レ師立レ名。一従二山門僧詮師一而受二玄義一故云二山門玄義一。　（N・三〇〇上）

といつている。したがつて、次に述べる吉蔵の「中論玄義」と区別するために、三論学派の伝承では経録にいう法朗の「中論玄義」をとくに「山門玄義」と通称したと考えられる。ただし、経録の一巻本は誤りで本来五巻本であつたのか、あるいは、なぜ安澄が同書の巻第五のみを引用したのか不可解な点もあり、このことを考慮して「巻五云」は衍字で経録の如く一巻であつたとも考えられる。なお五巻という巻数から類推されるように吉蔵「大乗玄論」五巻との混同が予想されるが、この点については「疏記」巻二に

又山門玄義第五云。釈顕亮立二不空仮名義一。干法邃支道林立二空仮名義一。又大乗玄論第一巻末云。次周顒明二三宗一諦一。（後略）　（N・二五四上）

とあつて明らかに区別して扱つている。とにかく、通称山門玄義なる書が法朗の著述であることは紛れもなく、また、中論乃至三論に関する玄義であることも確かである。

(五) 吉蔵　玄義　一巻　吉蔵疏の巻一末に、竜樹の出世年代について、

問。竜樹於二像法中一何時出耶。答。叡師成実論序述二羅什語一云。馬鳴是三百五十年出。竜樹是五百三十年出。摩耶経云二七百年出一。匡山慧遠法師云下接二九百年之運一則九百年出上。具如二玄義中釈一。　（T・四二・一八b）

と述べてその詳細な説明を「玄義」に譲つている。これを注記した安澄は、

言二具如玄義中釈一者。中論玄義破二外道一。毗曇成実大乗意明二人正処一。具引二楞伽経摩耶経一明二論主出世破邪顕正一云二七百年出世一也。今引二此文一也。　（N・一七四上）

といつて、玄義とは「中論玄義」であると明示している。同様に小乗三部の得失を論じて、

但今望二大乗実相言亡慮絶一則計二人法俱有一為二下品一。無人盲法為二中品一。人法俱空為二上品一。如二玄義中叙レ之也（T・四二・一九上）

とある一文に対しても、

言二但今望大乗実相言亡慮絶等一。中論玄義云。於二小乗内一自分二三品一。一者俱不レ得二二空一。如二犢子部云一。四大和合有二於眼法一。五陰

和合別有二人法一。此下根人也。二者薩衛之流但得二人空一。不レ得二法空一。為二次根人一也。三者譬喩訶梨跋摩之流具得二二空一。為二上根人一也。約二空義浅深一即毗曇是小乗之劣。成実為二小内之勝一。故云二玄義中説一也。　（N・一八七上）

といっている。ほかにも吉蔵がとくに言及しなくても安澄が吉蔵の「中論玄義」を引いてこれを参照しているものが数例ある。[17] ところが、安澄が引用した「中論玄義」の前記二文は、それぞれ現存の吉蔵「三論玄義」の中に同一の文を見出すことができる。すなわち前者については、

言二人正一者。楞伽経大慧菩薩問。世尊滅度後。此法何人持。仏説レ偈答。於二我滅度後一。南天大国中。有二大徳比丘一。名二竜樹菩薩一。（中略）次摩耶経云。摩耶問二阿難一曰。仏滅度後。何人持レ法。（中略）七百年間有二一比丘一曰二竜樹一。（後略）　（T・四五・六b）

と一致し、後者については、

問。毘曇但明二人空一。成実具明二二空一。云何両論無レ有二優劣一。答於二小乗内一分二三品一。一者俱不レ得二二空一。如二犢子部云一。四大和合有二於眼法一。五陰和合別有二人法一。此下根人也。二者薩衛之流。但得二人空一。不レ得二法空一。為二次根人一也。三者譬喩訶梨之流。具得二二空一。為二上根人一也。約二空義一浅深。則毘曇為二小乗之劣一。成実為二小内之勝一也。　（T・四五・四c―五a）

を指すことは明らかである。さらに吉蔵疏に「玄義中具釈」とあるを安澄がとくに「中論玄義」とはいわず、「一巻玄義云」のように注する場合もある。（N・二二〇上、N・一〇〇〇下）しかし、これらもいずれも現存の「三論玄義」にその相当文が存在する。そして、安澄の「疏記」中には一度も「三論玄義云」という引用はない。そこで考えられることは、吉蔵疏に「玄義云」とあればそれは例外なく「三論玄義」のことであり、安澄の時代にはとくにこれを「中論玄義」と称したということである。このことは経録の記載とも符合する。すなわち、経録に「中論玄義一巻吉蔵撰」とある場合は「三論玄義」を欠き（安遠録・永超録）、逆に「三論玄義一巻吉蔵撰」とあれば「中論玄義」について言及されることはない（奈良朝現在録）。さらに後代の珍海（一〇九二―一一五二）になると、「中論玄義」と「三論玄義」は同時に交互に多数引用されている。たとえば「三論玄疏文義要」巻第二に

中論玄初云。夫適化無方。陶誘非レ一。考二聖心一以息レ患為レ主。統二教意一以通レ理為レ宗。　（T・七〇・二二九a）

とあるが、同巻にはすぐ続けて、

三論玄云。辨二此論宗旨一云。亦以二二諦一為レ宗。但今欲レ示二三論不同一。宜下以二境智一為上宗。　（T・七〇・二三〇c）

という如くである。これらはいずれも例外なく現存「三論玄義」中に相当文を見出すことのできるものばかりである。しかし、このような例は珍海において独特な用法であって、安澄では「中論玄義」、他の三論学者にあっては「三論玄義」

として統一的に引用する場合が多い。そこで結論としては、「中論玄義」と「三論玄義」という異なつた二本があつてたまたま内容が重複していたと見るよりは、この二本は南都の伝承では同本異称のままにそれぞれに伝写されて二本となつていたと見るべきであろう。珍海の併用がこれを示唆している。したがつて、安澄のいう吉蔵の「中論玄義」とは現存の「三論玄義」にほかならない。

(六) 浄秀師疏　四巻　以上の中論釈のほかに、安澄の時代に作者不詳の四巻本の疏があり、安澄はこれを「疑うらくは浄秀師の疏ならん」(N・二〇〇下)といつている。しかし、その内容がどのようなものであつたかは紹介していない。浄秀その人の伝も不詳である。

1　「中論疏記」(八巻本末)(大正大蔵経巻第六五・一No. 2255)「中観論疏記」(十巻本末・会本)(日本大蔵経三論章疏上下)。

2　伝記は元亨釈書巻第二、本朝高僧伝巻第五等を参照。

3　法政大学泰本融教授の「国訳中観論疏」(国訳一切経和漢選述26論疏部六)中の「中観論疏解題」二四頁には、安澄が中論疏記の中で引用する文献・学説を整理して列記してあり、きわめて便利である。

4　羽渓了諦「中論解題」(国訳一切経中観部一)三〇頁参照。快憲の「中観論品釈」(大正大蔵経巻第六五・二四八No. 2256日本大蔵経三論章疏下)の成立は一五二七(大永七)年。

5　拙稿「三論教学成立史上の諸問題」(駒沢大学仏教学部研究紀要二三号昭和四〇年三月)参照。

6　僧叡と曇影の「中論序」については、それぞれ出三蔵記集巻第十一(T・五五・七六c—七七b)に「中論序第一」「中論序第二」として収録されている。

7　高僧伝巻第六釈曇影伝「什後出二妙法華経一。影既旧所二命宗一。特加二深思一。乃著二法華義疏四巻一。并注二中論一」(T・五〇・三六四a)また、経録には東城伝燈目録に「中論疏二巻曇影師」(T・五五・一一五九a)新編諸宗教蔵総録に「中観論疏一巻曇影述」(T・五五・一一七六c)のように記録されている。しかし、奈良朝現在一切経目録(石田茂作篇)、および三論宗章疏(安遠録)には見えない。

8　N・六六下、一一三上、一二〇上、二〇〇下、四一六上、四一八上、四二〇上、四二三上、四四五下、五〇七上、五三二上、五七六下、五八八下、六八九下、六九八上、七〇一上、七一三上、七六六上、七六一下、七八八下、八六五下、八九六上、九三六下等参照。

9　吉蔵疏「復有二北土三論師一。釈二此八不一凡有二三義一。一就二空理一釈。明二畢竟空理一非レ起非レ出。是故不生。(後略)」(T・四二・三二c)安澄疏記「疏云二復有北土三論師等一者。此下第二約二北土三論師義一而為レ言之。於レ中有レ二。初述レ計。後破二此文初一也。琛法師疏第一巻云。初云二不生不滅一者此偈略作二三対一解釈。第一就二空理一解。第二就二縁起事一解。第三対レ執解。就二空理一解者。明法性本空非レ起非レ出不レ得レ名レ生。(後略)」(N・三二八下—三二九上)

10　疏記には法琛の伝は「高僧伝第三云」とあるも、これは第四

巻の誤りである。また高僧伝には法深のようになつているが、安澄は「言二琛法師一者有本作二深字一」と注し、琛と深、或いは採が容易に混同されることを注意している。

11　吉蔵疏巻二末「次琛法師云。本無者未レ有二色法一。先有二於無一故従レ無出レ有。即無在二有先一有在二無後一。故称二本無一。此釈為二肇公不真空論所破一」（十・四二・二九a）参照。

12　勝鬘宝窟巻上（T・三七・五a—b）大乗玄論巻第四（T・四五・六〇c）涅槃経遊意（T・三八・二三三b）参照。なお、涅槃経遊意に陞師とあるも琦師の誤記。宇井伯寿「国訳一切経和漢撰述44諸宗部一」一〇七頁の脚注参照。

13　高僧伝巻第七釈法琦伝「乃著二涅槃法華大品勝鬘等義疏一」（T・五〇・三七四c）。

14　詳しくは「中論疏述義」で、安澄の疏記と同じように吉蔵の「中論疏」に対する注解の書である。湯用彤「漢魏両晋南北朝仏教史」一六九頁に「述義乃中論述義、作者不明」とあるは中論疏述義の誤りであろう。

15　疏記中に「山門玄義云」として引用されるのは次の五ケ所である。N・二五四上、二九二上—二九三下、二九四上、二九六下、二九六下—三〇〇下。

16　三論宗章疏「中論玄一巻興皇寺法朗述」（T・五五・一一三七c）東域伝燈目録「中論玄一巻興皇寺法朗師」（T・五五・一一五九a）等参照。なお、湯前掲書一六九頁に「山門玄義似即陳・三論師興皇法朗作之中論玄義」とあるを参照。

17　N・一九四下、二二一下、二五〇上、二五一下、等参照。

（文部省科学研究費による研究成果報告の一部である。）

執筆者紹介（三）

佐々木　邦磨（大正大学助手）
後藤　尚孝（大正大学副手）
嶋口　儀秋（大谷大学大学院）
広川　堯敏（大正大学助手）
峰岸　秀哉（曹洞宗教化研修所）
久住　謙是（立正大学大学院）
菊地　武（大谷大学大学院）
宮川　一敬（立正大学大学院）
遠藤　孝次郎（駒沢大学助教授）
河村　孝道（曹洞宗宗学研究所研究員）
山端　昭道（駒沢大学講師）
原田　弘道（東北福祉大学講師）
西山　広宣（竜谷大学大学院）
林　智康（竜谷大学大学院）
蓑島　和潤（竜谷大学仏典翻訳部員）
小林　昭英（仏教大学助教授）
高橋　弘次（竜谷大学助教授）
浅井　成海（大東文化大学助教授）
五十嵐　明宝（竜谷大学講師）
小林　実玄

（五二頁につづく）